トラック 29-2

　昔，ある地方を治めていたスルタンがいた。毎週金曜日になると，彼はモスクで 2 つか 3 つの問いを出した。彼の問いに答えられないと彼は人々の首を刎ねたのだった。
　最初の質問はこうだった。
「今，神はどの方角を向いておられるか？　神は今何をされているか？」。
　誰も答えられず，多くの首が刎ねられ，おしまいには彼は住民の相当数を殺すことになった。
　ある日，若者が村にやってきた。彼は老婆の家に身を寄せたが，彼女は村で生き延びるための条件について彼に説明をした。彼女はこう言った。
「お前はよそ者だ。毎週金曜になるとスルタンが誰も答えられない問いを出すんだよ。お前は彼の目につくだろうし，モスクの最前列に座らされてすぐにお前を殺してしまうことだろう。だからここに留まって外に出てはいけないよ」。
　彼は結局外出してしまい，どこから来てどこに住んでいるのか人々に尋ねられた。金曜になると人々は彼を探しに行って，彼はモスクの後ろの列に座った。スルタンが質問を始めると，若者はモスクの後ろに座った。スルタンの最初の質問はこうだった。
「神は今，どの方向を向いておられるか？」。
　若者は立ち上がってスルタンに言った。
「答えて欲しいですか？」。
　スルタンはうなずいた。
　若者は松明を取って火をつけた。彼は次のようにスルタンに問いかけた。
「この光はどの方向に行ってますか？」。
　スルタンは答えた。
「至る所だ，光は至る所を明るくする」。
　若者は答えた。
「神にしても同じことです。神には前も後ろもなく，同時に至る所におられるのです」。
　スルタンは彼の答えを認め，2 つ目の質問をした。
「神は今何をされておられるのか」。
　若者はスルタンに答えた。
「あなたのマント，杖，クルアーンを私に渡しなさい。これが神の御業であることはわかるでしょう。どういう理由で，スルタンが首を刎ねるようなことをしたり，抗いもなしに服を剥いだりするのか。お前たちは何年もの間，恥知らずのスルタンを戴いていた。どこかに入れてつないでおけ」。